

# 韓国における日本近代文学運動の評価考察

—『種蒔く人』の評価—

*The Sower (Tanemakuhito) : Its Reception and Influence in Korea*

李 修 京

Soo-Kyung YI

## 一 はじめに

一九二一年に「偽りと欺瞞に充ちた現代の生活に我慢しきれなくなつて‘何うかにしなければならぬ’という気持ちが一つとなつて」秋田で産声をあげた『種蒔く人』誌（以下、『種蒔く人』と称す）が、二〇〇一年で発行八〇周年を迎えた。近代日本における世界主義雑誌として、文化・芸術を媒体に世界と日本の架け橋役を試みた『種蒔く人』は、今日のような高度な国際情報化社会とは比べるべくもない状況だったにも関わらず、第三インターの紹介を始めとして、国際情勢や世界的諸問題をいち早く日本に伝えようと努めた。その動きは、近代思想の黎明期における混沌とした当時の日本だけではなく、隣の韓国社会にも紹介された。韓国は当時日本の植民地と化し、大韓帝国は一九一〇年から日本の敗戦まで日本の強圧のもとで‘朝鮮’と呼ばれていた。即ち、両国の関係は、自文化が認められない植民地朝鮮とその国を支配する日本という関係であり、被支配社会と支配社会という状況であった。しかし、それにも関わらず、一つの思想的普遍性と朝鮮独自の社会状況によって、秋田で生まれて東京で再発行された『種蒔く人』が、朝鮮の文学者・<sup>キムキジン</sup>金基鎮によって紹介された。そして結果的に『種蒔く人』は、保守的階級性による特権的文学性が根強く残っていた儒教社会の朝鮮で、民衆教化を図ろうとした大衆文学の普及と知識人の実践的活動を促す動きに一定の影響を与えるようになった。

本稿では、植民地下の朝鮮社会に紹介された『種蒔く人』が、当時、どのような目的で紹介されたか、また、今日に至るまでどのような評

価がなされているのかを考察して、生みの親である秋田や日本国内ではない第三地域の一つである韓国での『種蒔く人』の客観的評価をうかがうことにする。

## 二 単行本にみる『種蒔く人』

①金基鎮とともに KAPF を結成した朴英熙について論じた孫海鎰は、「金八峰は東京留学時代、社会主義者の麻生久と付き合いながら階級文学に傾倒し、雑誌『種蒔く人』等に刺激を受け、学業を中断したまま一九二三年五月に帰国した」<sup>1)</sup>「当時の日本文壇は本間久雄の「民衆芸術の意義及び価値」『早稲田文学』（一九一六、八）、中野秀人の「第四階級の文学」『文章世界』（一九一九、九）、有島武郎の宣言「改造」（一九二二、一）などに続いて登場した『種蒔く人』の発刊を契機としてプロレタリア文学運動が本格的に台頭するようになり労働組合運動も加熱した時期であった」<sup>2)</sup>と述べている。しかし、『種蒔く人』の概要や社会的位置づけの分析が見られないため、文献の引用のみによる文脈上の展開の域を出ない短絡的な紹介である。

②金允植は、韓国の文学雑誌『白潮』の発行期の日本と朴英熙と金基鎮を考察するため、『種蒔く人』について長谷川泉の文献から引用し、「自由民権運動を背景にして明治初期の政治小説、ヒューマニズムを基にした日露戦争以後の社会小説、反戦文学、戦争批判文学、ロマン・ロランの民衆芸術論、労働文学、第四階級の主張などをもとにした一九二三年の『種蒔く人』の創刊により前面に現れた階級意識の文学である」<sup>3)</sup>と述べている<sup>4)</sup>。また、「普通日本プロレタリア文学運動の出発は『種蒔く人』の登場に始まると言われている。しかし、この言葉は西欧文明を受け入れて資本主義前期に入った日本近代社会の矛盾を克服する社会の努力が、プロレタリアとの結合に接近したこと

を意味するだけである。このような動向は(1)自由民権イデオロギーを背景とした明治初期の政治小説(韓国の場合、新小説に近い)、(2)人道主義に根付いた社会小説、反戦文学、戦争批判文学、(3)民衆芸術論、労働文学、第四階級文学、(4)民衆詩、(5)プロレタリア演劇前史にあたる先駆的諸劇団活動などを背景にしたのである。』<sup>9)</sup>と前述の長谷川泉の文献を引用して述べた後、「その中で、民衆芸術と第四階級文学が重要である。(中略)その狭間でインテリのあり方の問題が問われ、“白樺派”の巨頭である有島武郎の「宣言」(『改造』一九二二年一月)が発表されたりした。このような思想的背景下でアンリ・バルビュスの影響を受けて帰国した小牧近江が『種蒔く人』(一九二一、二、三号で終刊)を発行したことで、実質的プロレタリア文学が発芽するようになる。』<sup>9)</sup>と述べている。また、上記のほか、『韓国近代文芸批評史研究』<sup>7)</sup>での『種蒔く人』の紹介もほぼ同じ内容である。本書では、土崎版『種蒔く人』の創刊号の宣言と東京版『種蒔く人』の創刊辞が原語で紹介されるなど、『種蒔く人』の原典に触れたことがうかがえる。しかし、上記の両引用文に見られる『種蒔く人』の発行年度の間違ひは誤字としても、『韓国近代文芸批評史研究』における『種蒔く人』紹介では「この雑誌『種蒔く人』は一九二三年東京大地震の時、韓国人虐殺の告発で発禁(処分一筆者注)される。』<sup>9)</sup>と述べられており、『種蒔く人』が韓国人虐殺の告発によって発禁処分となったかのように解釈されている。韓国人虐殺の告発文であるとするれば、関東大震災直後に出された「帝都震災号外」を指すのであり、この号外は当時修羅場となっていた東京ではない秋田で今野賢三と金子洋文によって発行されたが、いくつかの理由により発禁となった四頁のものである<sup>9)</sup>。その後、社会的に厳しい状況の中でも『種蒔く人』は翌年の一月に最後の『種蒔き雑記』を発行しており、朝鮮人虐殺の告発文が主因で発禁となったという言葉はどこにも見当たらないため、金允植の「帝都震災号外」による『種蒔く人』の発禁論には補足の説明が必要となってくる<sup>10)</sup>。いずれにしても、金允植は、『種蒔く人』の論究というよりも、日本近代文学史上、もしくは日本プロレタリア文学運動における『種蒔く人』の位置づけを述べるための評価及び紹介であるため、多くの八峰研究の参考文献として用いられている。

③韓国の初期プロレタリア文学の中心的活動者である金基鎮が『種蒔く人』から少なからぬ影響を受けたと述べているキムヨンミンも、日本の文献の引用という面では上記の内容とほぼ類似している。次の吉田精一らの翻訳文献を引用し、「(略)一九二一年一〇月、日本プロレタリア文学最初の雑誌である『種蒔く人』<sup>11)</sup>が創刊され、一九二二年以降、この雑誌は益々勢力を得て行った」<sup>12)</sup>と東京版『種蒔く人』の発行に触れた後、金基鎮と『種蒔く人』について「雑誌『種蒔く人』に翻訳発表されたロマン・ロランとアンリ・バルビュスとの四回(五回一筆者注)にわたる民衆運動に関する論争文を読みながらバルビュスの立場に共感する。(中略)麻生久一筆者注)の影響のもとで『種蒔く人』を耽読していた金基鎮は、一九二三年五月に土月会の演劇公演を契機に帰国する。』<sup>13)</sup>と記した上、金基鎮の初期思想的形成について詳細に述べている。しかし、『種蒔く人』に関する認識は希薄であり、雑誌本文については触れていない。

④朴明用は『種蒔く人』について比較的詳細に述べている。韓国のプロレタリア文学運動が金基鎮によって本格的に受け入れられたと述べた後、「この頃彼の精神世界に変化を与えたのが日本プロレタリア文学の出発点として定説になっている『種蒔く人』である。彼はこの雑誌に掲載していたアンリ・バルビュスとロマン・ロランが四回にわたって論争した論文の翻訳ものを読んで「文学が従来考えていたように小さな象牙の塔にこもっているのではなく、その領域は宇宙のように広い」と覚る。』<sup>14)</sup>と論じている。また、同頁の脚注で『種蒔く人』の概略を述べている<sup>15)</sup>ほか、日本語による本文の引用と『種蒔く人』関連の記述が三四頁に及ぶことから、原文の内容に直接触れている可能性がある。一方、『種蒔く人』の評価では、「(小牧近江一筆者注)の郷里の土崎で創刊し、第三号まで発刊された雑誌だが、実質的に歴史的成果をあげたのは第二次として東京で再創刊された時からである。当時、日本知識層の注目を浴びていたこの雑誌は、戦争の威脅と戦うためにインテリが思想のインターナショナルで結ばなければならないと主張したのである。村松正俊が起草としたこの創刊宣言文では「神の否定」と「革命の真理擁護」を宣言し、「題言」ではロシアの飢饉救済を思想家に強く求めることで思想と社会問題を主題とした。従って、この雑誌は労働者階級の雑誌ではなく、インテリゲンチヤの雑誌であり、一種の思想運動のための同人誌に過ぎず、文学運動のための雑誌ではなかった。これ

は『熱風』（一九二二年四月創刊）、『赤と黒』（一九二三年一月創刊）などが『種時く人』がインテリの傾向だと大きく反対した点でも明らかである。』<sup>16)</sup>と、参考文献を引用して述べている。しかし、『種時く人』が、労働者及び社会の被支配階級を取り扱った少なからぬ新鋭文学作品を生み出した点で、初期プロレタリア文学運動の礎石としての役割を果たした点についての評価はなされていない。『種時く人』は、成熟度の高い形の整った文学運動にはならなかったが、目的意識をもって社会的諸問題を文学や文化運動を通じて究明することに努め、日本における初期プロレタリア文学運動の導火線の一つになったことは否定できない。『種時く人』の全体を解説すれば、『種時く人』の後半はプロパガンダ的色彩が濃くなるが、基本的には文学運動を含む文化運動の形態への試みを展開し続けたことは明らかである。小田切秀雄も「この雑誌は、進歩的文学の意義と存在理由を社会的に明らかにし、革命運動の全体の展開のなかに、文学・文化の運動を位置づけた、ということがあります。(略)」<sup>17)</sup>と述べている。従って、「文学運動のための雑誌ではなかった」という解釈は、『種時く人』の趣旨及び内容に関する認識が浅いとも見受けられる。著者はまた、『熱風』と『赤と黒』がアナーキズムの立場で発刊され、『種時く人』はマルクス主義を強化して行ったと記した後、『種時く人』の解散については次のように述べている。

「『種時く人』は同人間の意見対立と外的影響によって、一九二三年九月一日に関東地方で発生した大震災以前の八月に事実上解散を決定し、九月中旬に解散した。今までこの雑誌の解散原因は、大部分（『種時く人』の解散要因を語った人々の解釈一筆者）が大震災の時の韓国人虐殺について書いた‘号外報道’（帝都震災号外一筆者注）にあるとされてきたが、この‘号外’は解散後の一〇月一日に発行されたために解散とは関係なく、実際は‘日本共産党’が介入し、‘強力な運動への転換’への意見で対立し解散したのである。」<sup>18)</sup>

この引用文によれば、記述の前半で『種時く人』の解散について触れた後、関東大震災の‘号外’が『種時く人』の解散原因だという分析が大部分だという認識を前提とした。そして、後半では著者自らの否定論を展開している。だが、この引用文では『種時く人』の解散原因が‘号外’にあると論じた諸研究者の分析、即ち、

論拠が明示されていない。また、上記引用部分の次の文では、青野季吉が述べた『種時く人』解散の理由（団体としての統制の崩壊、経済的弱化、内部の意見対立）に説明を加えた後、文献引用だけで記述を締め括っている。前の引用文で‘大部分の解釈’と断言している著者の見解を立証する諸資料が提示なきまま展開されているため、著者自身の個人的意見または推測の域を出ない可能性がある。少なくとも祖父江昭二は、一九二三年一〇月発行の「帝都震災号外」で朝鮮人の虐殺に対して激しいプロテストの意を表明したことと、一九二四年一月に『種時き雑記第一冊』を発行したことに言及するとともに、‘関東大震災’という出来事とそれに乗じた弾圧の強化とによって『種時く人』が余儀なく廃刊に追い込まれたと述べている<sup>19)</sup>。また、『種時く人』発起人の一人である小牧近江も、解散原因として経済的問題や内部の意見対立は挙げているものの、「帝都震災号外」を解散原因だとは言っていないのであり、青野季吉も『文芸戦線』創刊号で種時き社が一九二三年暮に解散し、自ずから『種時く人』も廃刊することとなったと断言している<sup>20)</sup>。尚、小牧近江同様『種時く人』発起人の一人である金子洋文も、自著の『種時く人伝』の中で「雑誌『種時く人』は一九二一年二月創刊し、関東大震災にあつて終刊となった。」<sup>21)</sup>と明言している。運動の当事者や上記の文学評論家の意見に見る限り、「帝都震災号外」が『種時く人』の解散要因という根拠は希薄である。少なくとも、上記引用文における著者の認識は、厳密な論拠の提示がなく、客観性にやや欠けている意見だと考えられる。他の『種時く人』紹介に比べれば、著者はかなり比重をおいて『種時く人』の引用を行おうと試みている。だが、原文引用の際に生じた誤字が目立つほか、著者独自の分析が少ないため、『種時く人』に関する引用文の展開に止まったような物足りなさを覚える。

⑤ 愼根緯は一九二〇年代初期の韓国で、芸術至上主義をブルジョア芸術と攻撃していた理論は『種時く人』の宣言とその論旨に基づいていると述べた後、夜影が一九二四年一二月号の『靈臺』に掲載された『種時く人』論旨一部を批判

したことについて論じている<sup>22)</sup>。夜影の芸術至上主義攻撃の理由として『種蒔く人』からの引用として、次の三項目を引用している。

「一、経済的立場でみれば、少数を除いては芸術家もみんな被搾取階級だ。ではなぜプロレタリア文学運動を行わずにブルジョア芸術である芸術至上主義をするのか。それが間違いである。二、現在の文学運動は純全（純粋で完全な筆者注）の文学運動よりも先ずプロレタリア運動であるべきだ。だからその綱領も文芸上のプロレタリアその綱領であるべきだ。従って、プロレタリア綱領を度外視する芸術至上主義は排斥すべきだ。三、芸術の理想を美においてはならない。なぜなら、美意識は宗教的欲求から生まれるわけだからだ。」<sup>23)</sup>

夜影は『種蒔く人』からの引用だと述べているものの、出所の曖昧さと短絡的な引用文のために偏見的に捉えやすい。従って、議論の価値に疑念を抱かざるを得ないが、とりわけ、夜影が行った批判を略記すると、「一項については、芸術家は幅広い題材を扱い、意識が常に想像的分野だけで活動するため未知の世界を探索するのに熱中し、階級意識を持つことが出来ない。二項については、芸術家は階級対立がない将来の社会で価値を発揮する芸術上の綱領、即ち永遠性を持つ美のための美の創造を想像するのが最善の道である。時代を先見し、民衆を指導する芸術は、芸術のためのもっとも自由な個人主義世界が到来するはずだから、階級という暴君を持つ資本主義社会と世論という暴君を持つ社会主義世界のいずれも排斥すべきである。三項については、絶対性を持つ美意識だから悪魔性が多いほどより価値を発揮するのであり、美意識は道徳的欲求を超越するので宗教とは縁が遠い。従って美意識が宗教的欲求から生まれることを否認する。」<sup>24)</sup>である。これに対して、著者は夜影が引用した文の出所には触れず<sup>25)</sup>、『種蒔く人』から引用した部分の矛盾と夜影の同語反覆的理論を指摘した後、それらの事実から芸術至上主義をめぐる論議が初歩的段階に止まっていると批評している<sup>26)</sup>。また、『種蒔く人』からの引用部分は、当時日本のプロレタリア文学運動が芸術至上主義を攻撃の主な対象としていること、およびプロレタリア文学運動が運動としての次元にあること、を明らかにしていると明言し、関連の日本の文献を数多く挙げている。中でも、東京版『種蒔く人』の創刊号と同誌第二巻九号、第四巻一六号が明記されており、原典に依拠した分析が行われていると考えられる<sup>27)</sup>。

⑥韓国と日本のプロレタリア文学を比較している林奎燦は、『種蒔く人』の全般的評価を行っている。「『種蒔く人』時代」という項目を別途設けた六頁の中で、バルビュスと小牧近江とを関連づけるとともに、『種蒔く人』の全体像の概括および比較的詳細な内容分析による評価を行っている。その他、所々で韓国プロレタリア文学と『種蒔く人』との関連性を付け加えている。『種蒔く人』についての主な評価内容をみてみよう。まず、民衆芸術論と労働文学論の発展によって実った『種蒔く人』は、広い知識階級から注目を集めたと述べた後、クラルテ運動の日本での延長として出発した『種蒔く人』は、当時成長していた階級の文学運動と結合することで、日本プロレタリア文学運動の中心機関の任務を背負うようになったが、第三インターを支持はするものの、昭和期の政治的共産主義とは違った理想主義的・人道主義的色彩をもってたと評価している<sup>28)</sup>。また、『種蒔く人』は少数の同人が世界の時流に参加しているという自負を持って力を結集した先駆的思想運動の実りであり、彼らの功績は問題解決よりも問題の提起にあったと評価した後、文学的作品が目立たなかった理由として、紙数が六四頁に限られていたことに一因があることを指摘している<sup>29)</sup>。しかし、金子洋文、前田河廣一郎、今野賢三、中西伊之助、山田清三郎、吉田金重、細井和喜藏のような作家が生み出されたことにも注目している<sup>30)</sup>。そして、外国の芸術・芸術家の動きの紹介とブルジョア文壇への攻撃、理論的活動の様子を言及し、「武器としての芸術」の意義を初めて確立したことを明記している<sup>31)</sup>。また、プロレタリア文学の理論家として平林初之輔と青野季吉を高く評価するが、「階級芸術論」「知識階級論」「社会主義運動としての芸術運動論」のような政治と文学問題を主に扱うことで政治優位性を受容せざるを得ない方向へ転換したことについても言及している。しかし、『種蒔く人』は、大正期から昭和期へ移行する架け橋の役割を果たした雑誌であり、海外の潮流を迅速に伝えた点と水平社運動、無産女性問題、農村問題などの社会的諸問題に積極的に対処したことにその意義があると評価している<sup>32)</sup>。部分的な誤

字と脚注四二番のような疑問は残るものの、著者は、『種蒔く人』の結成当初の趣旨とその後の展開過程、日本と韓国における『種蒔く人』の位置づけ、構成員と内容を総体的に纏めている。また、平林初之輔の「文芸運動と労働運動」（『種蒔く人』一九二二年六月号）をはじめ、『時事新報』『近代思想』『文芸戦線』『改造』『前衛』『戦旗』『NAPF』『プロレタリア文化』『文学評論』の関連論文の翻訳が資料として提示されていることから、日本近代プロレタリア文学における『種蒔く人』の位置づけと関連する諸事実の分析が多岐に渡って行われていることがうかがえる。

⑦『日本社会主義運動と社会主義文学』<sup>33)</sup>をまとめた金采洙は、同書で「アナ・ボル論争と『種蒔く人』」の項目を設けて、四頁にわたってクラルテ運動と日本における『種蒔く人』の動きを簡略に論じている。著者は社会主義運動を世界的視点から捉えた後、日本の近現代に至るまでの様々な社会主義運動と社会主義文学にアプローチする方法をとっているため、日本の社会主義運動に関する全般的分析は整っている一方、『種蒔く人』についてはそれほど詳細に論究されていない。また、東京版が『種蒔き雑記』と述べられているなど、『種蒔く人』全巻に関する認識が浅い<sup>34)</sup>。小牧近江がクラルテ運動に参加し、コミンテルンとの接触を持ったという短絡的な概要が述べられているが、クラルテ運動とコミンテルンとの関わり及び活動の経緯が論じられていない。ロシア革命一周年記念日の『ジュルナル・ドゥ・プープル』紙にアンリ・バルビュスの小説の一部を紹介した記事が載ったが、その新聞の街頭販売の時期は正式なクラルテ団の結成の時期ではなかったのであり<sup>35)</sup>、コミンテルン運動に関しても小牧近江自ら否定をしている<sup>36)</sup>。従って、著者の小牧近江に関する認識が深いとは言いがたい。しかし、小牧近江の活動では、土崎版では反戦平和、ロシア革命の擁護、あらゆる被圧階級の解放を主張し、東京版ではアンティミリタリズムと国際主義思想を土台に広範な思想上、芸術上、行動上の統一戦線を作ろうと試みたと評価し、『種蒔く人』で最も活躍した文学者として、評論に平林初之輔、

小説に金子洋文を挙げている。また、金子洋文は『種蒔く人』を通して生まれた日本労働文学の代表的作家の一人であると付け加えている<sup>37)</sup>。だが、著者の金子洋文に関する理解がどの程度のものであったかは、文学作品についての評論がなされていないため、知る余地がない。

⑧五人の執筆者がまとめた『日本文学の流れII』は、韓国放送通信大学校用の教材として編集されたもので、日本文学を簡単に紹介している。

『種蒔く人』については、社会主義文学運動を世界的な視野で方向付けようとした雑誌であり、プロレタリア文学の礎石をおいた意味で先駆的役割を担い、関東大震災の時に社会主義者と在日朝鮮人虐殺に明白に抗議したのはこの雑誌だけであったと述べている<sup>38)</sup>。日本文学の中でプロレタリア文学がどのように台頭したかを触れているが、『文芸戦線』関連の動きと青野季吉、中野重治、蔵原惟人、小林多喜二などに言及してプロレタリア文学の展開をわかりやすく論じている。

以上、『種蒔く人』に触れている単行本を考察してみた。その他に、『種蒔く人』の一部、『種蒔く人』での活動家の一部に関連する文献の翻訳を編集したのものとして、一九九〇年に小学館から出版された細政夫ほか編『日本現代文学史』（コジェソク訳、ソウル、文学と知性社、一九九八年）と趙鎮基編訳『日本プロレタリア文学』（ソウル、太学社、一九九四年）などがある。また、金基鎮の文学全集が発行されて、貴重な文献として金基鎮研究に用いられている<sup>39)</sup>。しかし、全集の本文には間違いが多く、金基鎮の記憶違いや編集上の未確認などによる事実誤認が、一九九〇年以降の金基鎮研究において誤ったまま引用された可能性が高い。中でも、『種蒔く人』、『種蒔蒔人』、『バルビュスとロマン・ロランの論争が四回』というような記述がそのまま引用されているのを、本稿の『種蒔く人』の評価でも確認できる<sup>40)</sup>。

### 三 研究論文にみる『種蒔く人』

①簡福均の「日本プロ文学流入の一考察（I）」では、『種蒔く人』に関する評価として、国際意

識の敏感さとロシア飢饉問題、諸外国作家らの論争を取り上げた中村光夫の評価を引用後、「小牧近江の思想はロシア共産党、第三インターの支持は受けたが政治的共産主義とは異なり、理想主義的人道主義に止まった」と述べて、脚注では『種蒔く人』の土崎版表紙に「青年理想主義冊子」と書かれているのがこの雑誌の性格を表しているといえる<sup>41)</sup>と記されている。この内容が引用されている部分は、前述の林奎燦と同様の脈絡に沿って述べられており、上記の引用部分は兩人ともまったく同じ内容であることに驚かざるを得ない。林奎燦の場合、著書に提示した日本の文献を一九八七年に編訳発行しているが、本文での詳細な原文引用の脚注は省かれている<sup>42)</sup>。一方、簡福均の論文は一九八九年に発表されており、脚注には引用文献が提示されているが、上記の引用部分だけは何の断りもないため、『種蒔く人』原文を解説しているものと考えられる。その後の展開としては、林奎燦は、『種蒔く人』の延長で『文芸戦線』が発刊されたことと述べた後、韓国プロレタリア文学論に移っている。一方の簡福均は、関東大震災後に社会主義理論が「疎外階級」ではなく、「教育を受けた大学生」の方に傾き、『種蒔く人』同人に東大新人会が加わって、本格的なプロレタリア文芸雑誌としての『文芸戦線』が創刊されたことと述べている<sup>43)</sup>。少なくとも、両方とも『種蒔く人』に基づいて、原文を直接引用している様子であり、日本語文献の解説力はあると考えられる。『種蒔く人』の評価においては偶然にしては重複しすぎているが、両人の研究経緯など知るよしもない筆者としては、本稿における上記引用文の是非論の展開は省略しておく。

さて、簡福均は、『種蒔く人』と『文芸戦線』の相違点として、社会で疎外された少数の特殊な思想家達の団体が『種蒔く人』であり、東大新人会を軸とした大学生による団体が『文芸戦線』であり、これらの構成員の差違はKAPF結成前の韓国と類似していると比較している<sup>44)</sup>。また、フィリップにも触れながら、プロレタリア文学界で農民文学運動が本格的に論じ始められたのがジャン・ルイ・フィリップ(Charles Louis PHILIPPE—筆者注)の記念講演会だと述べた後、NAPFとは違った意味の運動として

日本の農民文学作家、評論家によって展開されてきた点を注目すべきだと言及している。また、これらの農民文学運動は既に明治時代から展開されてきた民衆芸術論、全国農民芸術連盟、農民自活文化連盟などから影響を受けていることにも触れている<sup>45)</sup>。そして、結論では、小牧近江に関して次のように述べている。

「ロシア革命の成功以降、プロレタリア文学理論が全世界に波及しはじめ、(その理論を一筆者注)日本に流入した転信者は早大の露文学科教授の片上伸、同大学の仏文学科教授の小牧近江であった。プロレタリア理論の本格的流入は『種蒔く人』を発刊した小牧近江によってであった。」<sup>46)</sup>

この引用文で簡福均は、小牧近江を早稲田大学仏文学科教授だという大きな事実誤認をしている。小牧は法政大学社会学部教授として引退するまで、早稲田大学に籍をおいたことはない<sup>47)</sup>。また、日本へのプロレタリア文学の本格的流入が小牧近江によるという論は、あまりにも単純な主張である。のちに平林初之補、青野季吉によって活発となるプロレタリア文学理論の場を設けたのは小牧近江であるが、小牧近江がプロレタリア文学を本格的に流入したと主張するなら、日本近代のプロレタリア文学理論についての繊細な論議が必要となってくる。日本語の人名表記などの誤字は注意不足としても、小牧近江と『種蒔く人』を合体化させてプロレタリア文学または農民文学を評価したのは、簡福均の偏狭な理論であると考えられる。

②全榮慶の「KAPF 研究」には、『種蒔く人』は韓国新傾向派が登場した背景の一つだと記されている。また、韓国の新傾向派は、当時日本で盛んだった労働文学と第四階級の文学、そして『種蒔く人』(一九一〇)一派の影響を受け入れながら始まったと述べて、日本の新傾向の文学を国内に紹介した人が金基鎮であると解釈している<sup>48)</sup>。ここでの労働文学の影響とは、麻生久による影響と考えられる。また、韓国で扱われる新傾向派文学とは、プロレタリア文学の前の段階を示唆しており、金基鎮のKAPF結成前までの文学的活動がこの範疇に入るのである。著者は三つの段階でKAPFを論じているが、KAPF結成に関する金基鎮の思想動向、特にバルビュス関連の見解は記述されていない。長過

ざる文献引用が際立つ一方、金基鎮と『種蒔く人』の関係が記されたかと思うと、即日本のプロレタリア文学の概略の引用に移っているなど、論旨の明確さが欠けているといえる。

③バクジヨンは金基鎮の文学作品に『種蒔く人』が影響を与えたことに触れながら、『種蒔く人』が唱えていた‘真理’‘真実’との結びつきについて注目している。『種蒔く人』の原典は扱っていないものの、比較的正確な再引用を行っており、『種蒔く人』についての認識も明確である。まず、小田切秀雄の言葉を引用して、ロシア革命の擁護という形で一連の知識人の戦線であるアナキスト、民衆詩派、自由主義者、労働文学作家などを結合させる運動体として創刊された『種蒔く人』によって、日本プロレタリア文学運動が本格的に出発するに至ったと述べている<sup>49)</sup>。そして、植民地という特殊な状況下の金基鎮において、クラルテ運動や『種蒔く人』の綱領のような行動には制限があったことを指摘した後、『種蒔く人』は金基鎮にバルビュス主義を基調とする新しい芸術にめざめさせた架け橋役であったことを述べている。いわば、思想のインターナショナル、知識人の実践的行動に胸を打たれて、朝鮮での知識人の行動を促す‘種蒔く人’になろうとしたことを著者は記しているのである。そして、金基鎮の作品の中で重要な概念として頻繁に登場する‘真理’の源が東京版『種蒔く人』にあることに言及し、同宣言文の一部を日本語で引用している。また、金基鎮が朝鮮の‘種蒔く人’になろうとした契機となった『種蒔く人』が、クラルテ運動の日本における延長線上にあったことにも触れて、金基鎮が植民地の知識人（社会的特権性を有する点を含む一筆者注）としての社会的役割を模索したことにその意義を見出しているのである。そのため、既存の文学者らの意識転換に力を注いだのであり、結果として『種蒔く人』は金基鎮の初期思想の形成に理論的影響を与えていることを明記している。よくありがちな内容ではあるが、簡単且つ的確に『種蒔く人』と金基鎮とバルビュスの関係を取り上げている。著者は明確な目的意識のもとで日本での『種蒔く人』の評価と朝鮮での役割を要領よくまとめている。

#### 四 学位論文にみる『種蒔く人』

①金基鎮研究の初期研究者の一人である張師善は、修士論文「八峰金基鎮研究」で前掲書の『韓国近代文芸批評史研究』<sup>50)</sup>を引用し、ロシア革命の影響下で「イデオロギーを背景とした明治初期の政治小説、ヒューマンズムに基調した社会小説、反戦文学、民衆芸術論、労働文学、第四階級の文学論、民衆論、民衆芸術運動などが先駆的要素として指摘されている『種蒔く人』の出現は日本プロレタリア文学の出発点とみなされている。」<sup>51)</sup>と述べた後、比較的正確に概略を引用している。張師善は『種蒔く人』の出現は日本文壇だけではなく、当時日本に留学中の金基鎮にも大きな影響を与えたこと、特に『種蒔く人』に掲載していたバルビュスとロマン・ロランの論争やバルビュスの『クラルテ』が感銘を与えたことに言及しており、のちに発表される金基鎮研究論文の多くが張師善の脈絡線上を辿ることとなる。

②一九九〇年に発表された宋庚彬の修士論文「八峰金基鎮小説研究」では、引用だけによって展開されている限界性をもっているが、筆者の危惧が表明されている。‘H. バルビュスのクラルテ運動’と設けられた項目での『種蒔く人』の引用は、前掲した金允植の『韓国近代文芸批評史研究』の一七～一八頁部分から主となっている。

金允植は『種蒔く人』が日本文壇に影響を与えるのが東京版発行以降だと述べ、その発行年度を一九二三年としている。また、前述のように、『種蒔く人』が一九二三年の「朝鮮人虐殺の告発で発禁となった」ことをそのまま引用しているために、その発禁で『種蒔く人』が廃刊となったような事実誤認の論文になっているのである。一部を直訳して引用しておこう。

「第一次の『種蒔く人』は土崎で同人誌形式として一九二一年に三号まで発行されたが、文壇に影響を及ぼしはじめるのは、第二次運動として一九二三年に東京で第一号が出たあとからである。一九二三年東京大地震の際、韓国人虐殺の告発で発禁されるまで、主に自由民権イデオロギーを背景とした明治初期の政治小説、ヒューマンズムに基調とした社会小説及び反戦文学、民衆芸術論、労働文学、第四階級の文学論、民衆誌、民衆演劇運動などの先駆的役割を果たした。(略)」<sup>52)</sup>

論文の展開もまた金允植の内容に止まっており、自分の見解や理論を裏付ける立証作業が省

かれている点がこの論文の限界であるといえる。その外、五回にわたる『種蒔蒔人』の使用は、後に述べる趙洪奎論文でも見られる誤用と同質のものであり、原典確認の作業が不十分であると評することができる。

③一九九七年に発表された趙洪奎の修士論文では、金基鎮の批評文学研究の一環として『種蒔く人』が紹介されている。金基鎮が朝鮮の『白潮』を『種蒔く人』のように作ろうと試みて失敗したこと、『種蒔く人』におけるマキシム・ゴーリキーの称賛に言及するほかは、これまで述べてきたような簡単な概略に触れているに過ぎない。また、「民衆芸術論」と『労働文学論』は一旦『種蒔く人』で実を結ぶ<sup>53)</sup>という一面的な意見、一〇回以上の『種蒔蒔人』の誤用と人名・地名などの誤字、前述の単行本の殆どを参考文献にしており、日本語文献が示されていないことから、積極的な文献収集ではなく、韓国内の『種蒔く人』の評価に頼って述べられており、狭い認識となっている。

④シンチョラは博士論文「金基鎮の文学研究—文学と理念の関連様相」の中で復刻版『種蒔く人』を資料として提示した上、金基鎮が日本留学中にどのような影響を受けて思想を形成したかに焦点を当てている。著者はまず『種蒔く人』が、日本の覇権的軍国主義が危機を迎えていた一九二一年二月に社会主義者の小牧近江によって創刊された雑誌であり、一九二〇年代を前後として（ウォール街の破局は一九二八年から一筆者注）アメリカの経済的破局によって世界経済恐慌の波が日本にも押し寄せてきたのをきっかけとして発行された雑誌だと述べている<sup>54)</sup>。また、『種蒔く人』については次のように述べている。

「実際『種蒔く人』創刊号をみれば、雑誌というよりも手紙雑誌の性格が濃い。粗雑な紙質で、雑誌というよりはあまりにも内容と論調が明確な同人誌の性格をより強くする。（中略）表紙の種蒔く農夫の絵でもうかがえるように、現代資本主義社会の矛盾と不調理を強く批判する自然発生的社会主義的傾向の文書で埋められている。<sup>55)</sup>

この引用文からうかがえるのは、著者が土崎版の創刊号について述べていることである。また、東京版で取り上げられた諸論争について「当

時の資本主義の矛盾と社会主義的ユートピア意識に憧れていた知識人と労働者階級に相当な反響を呼び起こしたのだと評価される。言い換えれば、金基鎮はこの雑誌の傾向芸術と文化運動等に関する見解を身につけた後、それを当時の韓国文壇と文化運動に繋げる必要性を強く覚えて、その意欲を果敢に実践したのが『開闢』を中心に広げられた彼の詩評形式のエッセイだといえる。<sup>56)</sup>と評価している。即ち、当時的一部知識人層にも反響を呼んでいた『種蒔く人』が、朝鮮留学生の金基鎮によって、韓国での知識人の文化運動へと繋がった点で『種蒔く人』の評価を行っている。東京で麻生久に会って労働文学に目覚めていた金基鎮が、この類の雑誌に興味をもったことは自然的ともいえよう。労働者出身ではない金基鎮が韓国で知識人運動を必要としたことは、既存の知識人のあり方と植民地という特殊な状況に起因するが、東京版『種蒔く人』が取り上げた諸論争からバルビュスとクラルテ運動の影響を受けたこと、即ち一つの雑誌刊行の線上で知識人らが積極的に社会問題についての意識を表明し合い、社会文化運動を繰り広げることによって、既存の特権的象牙の塔にこもっていた知識人層の意識変革と大衆の教化を図ろうとした狙いがあった。この論文は、クラルテ運動についての認識は浅いが、『種蒔く人』と金基鎮との関連については包括的な評価がなされていると考えられる。

⑤修士、博士論文とも金基鎮研究を行った李炫子は、『種蒔く人』を金基鎮が受けた影響の一つとして評価している。だが、両方の論文とも『種蒔く人』を引用してはいるが、原典ではなく、前述した金允植の『韓国近代文芸批評史研究』からの再引用になっており、『種蒔く人』の評価も金允植の内容に限局された評価に過ぎない。従って、「『種蒔く人』は一九二三年関東大地震に関する政治事実を暴露した理由で廃刊されて、その後身として『文芸戦線』が一九二四年に刊行される。」<sup>57)</sup>という誤認が登場するのである。また、同博士論文では、『種蒔く人』の項目を設け、具体的に『種蒔く人』とクラルテ運動の限界及び問題点を指摘するよりも、土崎版『種蒔く人』の表紙に書かれた‘青年の理想主義冊子’という意味の仏語の表記は理想主義、人道主義的態度を象徴するものであり、徹底した階級意識を持った革命的態度では

なかったと論評し、金基鎮も理想主義的、世界主義的性格のクラルテ運動の延長であった『種蒔く人』の限界性を免れなかったと批判している。従って、金基鎮のプロレタリア文学はまだ理想主義的、世界主義的側面が強く、現実的に日本帝国主義に対する具体的認識がなかったことに言及している。クラルテ運動も『種蒔く人』も、理想主義的、世界主義的雑誌として当時は斬新で画期的なものだった。情報や活動に制約が多かった時代状況からすると、世界の情勢をいち早く伝えて論陣を張ることは容易ではなかったため、むしろ大きく評価すべき部分を逆に問題点としているのは、著者本人の原文の内容に対する理解や認識が不十分であるとしか言いようがない。また、同博士論文では、これらの雑誌が初期のプロレタリア文学という点で、必ずしもソビエト同盟支持のために生まれたわけではなく、反戦と大衆啓蒙の面での知識人の社会的役割を唱えたという点での意義を無視したままになっている。社会的時流によって後に政治色が濃くなるものの、クラルテ運動や『種蒔く人』の結成の経緯を認識していたなら、知識人が大衆に真実を伝える責務を果たさなければならないという運動の基本的趣旨を察知できたはずである。金基鎮が植民地解放という認識がなかったと言っているが、植民地における労働者階級ではない自らの出自、即ち知識層であるがどうあるべきかを模索する中で、『種蒔く人』が扱った「バルビュスとロマン・ロランの論争」と多数の進歩的知識人の意思表示による文学運動に影響を受けたのである。理想主義が目標になったこと、世界主義的発想が植民地の朝鮮には適切ではなかったことは確かであり、そのままの形で朝鮮に移植するのは問題であったとしても、それはクラルテ運動と『種蒔く人』がもっていた限界だったとも言えよう。むしろ、クラルテ運動が理想主義で世界主義知識人の連帯運動であったからこそ、世界で活躍していたアルバート・アインシュタイン、パブロ・ピカソ、東郷清児、アンリ・マチスなどのジャンルを問わない人々が『クラルテ』誌を飾ったのであろう。クラルテ運動や『種蒔く人』は、プロパガンダに硬直化した時点で思想的内部分裂に

直面し、経済的諸問題という重要な問題も抱えていた。筆者としては「『クラルテ』紙（または、雑誌）と『種蒔く人』には、植民地の知識人の論評や作品が発表されていないという限界性をもっていた」というほどのことは問題にしてほしいと感じるのである。あえて項目を設けるほどの比重をおくのなら、原文入手は無理だとしても、取り上げた論点に関連する参考資料から事実確認の作業を試みる基本的作業を忘れてはならない。その点、同論文での『種蒔く人』に関する評価は、著者の見解よりも文献引用の展開に止ってしまった感じがするが、金基鎮とクラルテ及び『種蒔く人』との関連性は広い意味ではまとめているといえよう。

## 五 むすびに

以上で韓国における『種蒔く人』の紹介の実態、そして今日に至るまでの諸評価を考察してみた。上記の評価がすべてではなく、また『種蒔く人』についての短い言及や、ここに取り上げた資料と重複する学位論文や単行本の類は、筆者の判断で省略したことを断っておこう。

植民地という特殊な状況と儒教的慣習の濃厚な影響という二重の圧迫におかれていた社会の矛盾と葛藤するとともに、日本でプロレタリア文学運動として展開していた『種蒔く人』を通じて知り得た知識人の実践的行動を、朝鮮で展開することに使命を覚えた金基鎮についての研究は、かなりなされてきた。しかし、上に論じてきたように、金基鎮と日本留学、小牧近江と『種蒔く人』、バルビュスとクラルテ運動の普遍的価値に対する認識の差は、研究者によってかなり異なっている。また、先行研究における事実誤認を確認することなく、安易な文献引用による誤用も散見される。むしろ、『種蒔く人』に主要な論点をおいた研究は殆どなされていないが、少なくとも韓国内での収集可能なあらゆる文献の比較を通じて事実を肉薄する努力を払うことは必須である。日本語という慣れない外国語の誤字が本意に生じるとしても、自らが取り扱う論題の状況を把握するための資料提示などは不可欠である。その点からすると、学位研究論文にも参考資料が限られていたり事実誤認

が放置されていたりする。だが、多くの評価からうかがえることは、金基鎮が日本留学中に出会った『種蒔く人』によって、クラルテ運動とバルビュス、ロマン・ロラン、小牧近江、金子洋文らの『種蒔く人』出身の作家、『種蒔く人』の展開と構成、プロレタリア文学運動のあり方とプロレタリア文学論などが朝鮮で紹介され、当時の朝鮮の土壌に合わせてプロレタリア文学運動の土台をつくったことを認識しており、その意味で『種蒔く人』が韓国近代文学界に新たな‘種蒔く人’を生み出したと言っても過言ではなからう。

大村益夫は「金基鎮こそ、朝鮮の地にプロレタリア文学の種を蒔いて、これを培養するのにもっとも先頭に立った文学者の一人だといえる。」<sup>56)</sup>と評価している。朝鮮プロレタリア文学の種蒔く人として評価される金基鎮の初期思想の形成および KAPF 結成、進歩的知識人の実践的活動と大衆文化への試みなどに少なからぬ影響を与えた『種蒔く人』への認識は、日本近代文学史だけの限りではないことが本稿で確認できたといえる。そして、従来は主として文学的側面が取り上げられてきたが、今後は様々な視点からの研究が行われ、より幅広い見解を見出す冒険も試みられてほしいと願わざるを得ない。その意味で、本稿は、韓国における数少ない『種蒔く人』評価に関する研究の手引き書としての役割を有するものと考えられる。

- 1) 孫海鎰『朴英熙文学研究』(ソウル、詩文学社、一九九四年)、五五頁。
- 2) 同『朴英熙文学研究』、五六頁。
- 3) 長谷川泉『近代日本文学評論史』(有精堂)、四六頁、再引用。
- 4) 金允植『朴英熙研究』(釜山、ヨルム社、一九八九年)、三三頁。
- 5) 次の文献でもほぼ同じ内容で『種蒔く人』の紹介がなされている。金允植『林和研究』(文学思想社、一九九〇年)、五八～五九頁参照。
- 6) 前掲『朴英熙研究』、五〇頁。
- 7) 金允植『韓国近代文芸批評史研究』(ソウル、一志社、一九九三年)。
- 8) 同『韓国近代文芸批評史研究』、一八頁。
- 9) 以下の文献で状況を詳細に述べている。今野賢三『「種蒔く人」解説書』(『種蒔く人』顕彰会、一九六二年)、二三～二四頁参照。野淵敏・雨宮正衛共編『「種蒔く人」の形成と問題性—小牧近江氏に聞く—』(秋田文学社、一九六七年)、三三頁。金子洋文「喜びは人とともに無限」『種蒔く人復刻版別冊』(日本近代文学研究所、一九六一年)、三頁。今野賢三「回想の中から」同上『種蒔く人復刻版別冊』、五頁。
- 10) 『種蒔く人復刻版別冊』で小田切進は、創刊号、一九二二年一月号、同年九月号、十一月号の計四号が発売禁止となり、「帝都震災号外」は二百部発行していることを明言している。小田切進「解説」同上『種蒔く人復刻版別冊』、九～一〇頁。金允植が長谷川泉の「関東大震災に際して号外を出して朝鮮人虐殺に抗議、休刊した。」を引用したなら、次に述べた「別冊として出された『種蒔く雑記亀戸の殉難者を哀悼するために第一冊』の果たした役割は大きい。」の認識を付け加えなければならない。休刊は朝鮮人虐殺に抗議したためではなく、それまで抱えてきた諸問題による結果だったのである。長谷川泉『近代日本文学思潮史』(至文堂、一九六一年)、九九頁。
- 11) 金允植の『韓日文学の様相』でも『種蒔く人たち』と表記されている。同(一志社、一九九六年)、七三頁、三九〇頁。
- 12) キムヨンミン『韓国文学批評論争史』(ソウル、ハンギル社、一九九二年)、四五頁。引用文の表記では、吉田精一、奥野健男『現代日本文学史』(柳呈訳、ソウル、ジョンウム社、一九八四年)、一五六～一五七頁が挙げられている。
- 13) 同『韓国文学批評論争史』、四六頁。
- 14) 朴明用『韓国プロレタリア文学研究』(ソウル、クルボツ社、一九九二年)、三〇頁。
- 15) 「『種蒔く人』は一九二二年二月二五日、小牧近江が中心となって彼の郷里である秋田の土崎で同郷の金子洋文、今野賢三など極少数が参加、反戦平和運動及び展開を目的に、創刊号表紙に自分は農夫だ。自分の綱領は労

- 働である。という宣言を載せて創刊したが、同年四月一七日に第三号を出して中断された。しかし、同年一〇月に東京で前述の同人以外に、中西伊之助、青野季吉、平林初之輔、前田河広一郎、山田清三郎、小牧近江、村松正俊、佐々木孝丸など二九名で執筆陣を拡大して再創刊されたが、一九二三年九月に対内外の影響で自主的に解散した。」同。
- 16) 同『韓国プロレタリア文学研究』、六〇頁。
  - 17) 小田切秀雄『所報六号』（日本近代文学研究所、一九六二年八月）、四頁。
  - 18) 同『韓国プロレタリア文学研究』、六三頁。
  - 19) 祖父江昭二『近代日本文学への探索』（未来社、一九九〇年）、一〇三頁。
  - 20) 小牧近江『種蒔くひとびと』（かまくら春秋社、一九七八年）、一三一～一三三頁参照。小牧近江「対談」『「種蒔く人」の形成と問題性—小牧近江氏に聞く—』（野淵敏・雨宮正衛共編、秋田文学社、一九六七年）、二九～三四頁参照。青野季吉『「文芸戦線」以前』『文芸戦線』（創刊号、一九二四年六月）、五頁。
  - 21) 金子洋文『種蒔く人伝』（労働大学、一九八四年）、九六頁。
  - 22) 慎根緯『韓日近代文学の比較研究』（ソウル、一潮閣、一九九五年）、二〇八～二一〇頁。
  - 23) 夜影、前掲「芸術と階級」『靈臺』六二頁。
  - 24) 同『靈臺』、六三頁～六四頁。
  - 25) 夜影の引用と反論に類似した部分は『種蒔く人』に所収されている次の文である。渡辺順二「吾等の要求する文芸」、光造「批評—「血に染む夕陽」」（以上、同誌第二年第二卷第七号、一九二二年四月号）、平林初之輔「文芸運動と労働運動」（同誌第二年第二卷第九号、一九二二年六月号）。
  - 26) 前掲『韓日近代文学の比較研究』、二〇九～二一〇頁参照。
  - 27) 同上、二〇九頁。
  - 28) 林奎燦編訳『日本プロ文学と韓国文学』（ソウル、研究社、一九八七年）、一六頁参照。
  - 29) 同、一七～二〇頁参照。
  - 30) 同、二〇頁。
  - 31) 同、一七頁参照。その他、尹柄魯は『種蒔く人』が日本プロ文学の初期中心雑誌であると簡単に評価している。『韓国近・現代文学史』（ソウル、明文堂、一九九一年）、一七四頁。
  - 32) 同、一七～二〇頁参照。
  - 33) 金采洙『日本社会主義運動と社会主義文学』（ソウル、高麗大学校出版部、一九九七年）。
  - 34) 同、二二五頁。
  - 35) 小牧近江はバルビュスを一九一九年一〇月下旬のクラルテ団の正式結成期に初対面を行っている。小牧近江「「クラルテ」の運動と日本の思想家」『我等』（第三三号、一九二一年八月）、五一～五二頁参照。
  - 36) 拙稿『植民地期の金基鎮及び関連知識人研究』（立命館大学、博士論文、二〇〇〇年）、四八頁参照。
  - 37) 前掲『日本社会主義運動と社会主義文学』、二二七頁。
  - 38) 尹相仁ほか共編『日本文学の流れII』（ソウル、韓国放送通信大学校出版部、二〇〇〇年）、一三四頁。
  - 39) 洪廷善編『金八峰文学全集』（ソウル、文学と知性社、一九八八年～一九八九年）。
  - 40) 同『金八峰文学全集V—論説と随想』（一九八九年）、一四五頁。同『金八峰文学全集II—回顧と記録』（一九八八年）、三四三頁。
  - 41) 簡福均「日本プロ文学流入の一考察（I）」『論文集第一九輯』（江南大学出版部、一九八九年）、三六頁。
  - 42) 林奎燦の修士論文「八峰金基鎮のプロ文学論についての考察」（ソウル、成均館大学校、一九八六年）では、日本語による文献が一切提示されていないことから修士作成時点は日本語の原文読みが出来なかった可能性もある。ドイツ文学部を卒業し、修士号取得の翌年に脚注二八番の編訳書を出版しており、当時の林奎燦の原文引用に関する日本語能力にも多少疑問を抱かざるを得ない。同修士論文での『種蒔く人』についても、金基鎮が影響を受けた雑誌であり、バルビュス主義の立場で唯物論的階級革命を題銘とし、のちに KAPF と繋がる日本プロ文学の先駆的雑誌であると簡単に述べら

- れているのみである。同、九～一〇頁参照。
- 43) 前掲「日本プロ文学流入の一考察 (I)」、三六頁。
- 44) 同。
- 45) 同、三八頁。
- 46) 同。
- 47) 近代日本社会運動史人物大事典編纂委員会編『近代日本社会運動史人物大事典2』(日外アソシエーツ、一九九七年)、六二六～六二七頁参照。鎌倉文学館編『特別展小牧近江』(鎌倉文学館、一九九三年)、二〇～二四頁参照。
- 48) 全榮慶「KAPF 研究」『同大論叢』(第二二輯、ソウル、同徳女子大学校、一九九二年)、四一八頁。
- 49) バクジヨン「八峰金基鎮の初期社会主義思想の形成過程—日本社会主義体験と影響」『韓国語文学研究』(第一二輯、ソウル、韓国外国語大学校韓国語文学研究会、二〇〇〇年一二月)、一七五頁参照。
- 50) 著者の金允植は『韓国近代文芸批評史研究』の前書きで、同書を一九七三年二月に他の出版社で同書を一度出版しているが、内容を修正・加筆して一九七六年に本書を上記の出版社で初版印刷していることを明らかにしている。従って、張師善が引用した文献は一九七三年二月出版の本だと考えられる。
- 51) 張師善「八峰金基鎮研究」(韓国ソウル、ソウル大学校修士論文、一九七三年)、二五頁。
- 52) 宋庚彬「八峰金基鎮小説研究」(韓国忠南、忠南大学校修士論文、一九九〇年)、一四頁。
- 53) 趙洪奎「八峰金基鎮の批評文学研究」(韓国光州、朝鮮大学校修士論文、一九九七年)、一五頁。
- 54) シンチョラ「金基鎮の文学研究—文学と理念の関連様相」(ソウル、漢陽大学校博士論文、一九九六年)、二七頁。
- 55) 同。
- 56) 同、二九頁。
- 57) 李炫于「八峰金基鎮研究—KAPF 活動を中心に」(韓国全州、又石大学校修士論文、一九九一年)、一〇頁。
- 58) 大村益夫「一九二〇年代初期の八峰金基鎮」(第二回朝鮮学国際学術討論会における報告、北京大学、一九八八年八月二三～二五日)、九頁。